し、

〔北條五代記〕關東永樂錢すたる事

今は天下一統の世となり、東西南北にて此二錢○永樂、をつかふ、されび共永樂一錢のかはりにびた四錢五錢つかふ、是により善惡をえらび、萬民やすからず、此よし公方に聞召、びた一錢を用ゆべし、永樂禁制と慶長十三午の年極月八日、武州江戸日本橋に高札たつ、それより天下の永樂すたる、

〔武江年表〕元和四年四月、日本橋御再興、

〔むさしあぶみ〕明れば十九日○明暦三年正月、中略巳の刻ばかりに、小石川傳通院表門之下、新鷹匠町大番衆與力の宿所より燒亡出來れり、○中略日本橋をはじめとして、江戸ありとあらゆる橋々六十ケ所○中略燒のこる、

〔江戸名所記〕日本橋

橋の長さ百餘間、此みなみにわたされし橋の下には、魚舟、槇舟數百艘こぎつどひて、日毎に市をたつる、橋のうへよりみれば、四方晴て景面白し、北に淺草寺、東えい山みゆ、南にふじの山峨々とそびえ、嶺は雲まにさし入て、鹿の子まだらに降つむ雪までのこりなくみゆ、西のかたは御城なり、東には海づらちかく行かふ舟もさだかにみえわたれり、されども橋のうへは、貴賤上下のぼる人くだる人、ゆく人歸る人、馬、のり物、人の行通ふ事、蟻の熊野まいりのごとし、あしたよりゆふべまで橋の兩わき一面にふさがり、をし合もみあひせき合て、ゑばしも足をためて立とまる事あたはず、うか〳〵とかまへたるものは、ふみたをされ、蹴たをされ、あるひは帶をきられて、刀わきざしをうしなひ、あるひは又きんちやくをきられ、又は手にもちたる物をもぎとられ、たまたま見つけてそれといはんとするに、人だまひの中に立まぎれて跡を見うしなふ、すべて西國よ